

山崎郷土叢書

NO. 137

令和3.8.28

山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町

大谷 司 郎

明治以降の山崎の年表 (十)

昭和五十八年から六十一年の頃

大谷 司 郎

明治以降の山崎を中心とした出来事を年表にして十回目になります。平成の世を前にして今回で一区切り付けます。

中学校統合問題で生徒の同盟休校にまで進展 中学校統合の第一段階の山崎中、菅野中については、それほど大きな反対運動が起らなかった。昭和五十九年(一九八四)四月に山崎西中学校として開校しました。しかし、神河中、蔦沢中の統合については根強い反対があり、町議会の開催日に住民五百人がデモ行進をしたり、昭和六十年三月と翌年の三月には生徒たちの同盟休校に進展する事態となりました。関係住民の旧中学校への熱い思いや統合への不安や不満が形として現れました。紆余曲折を経て昭和六十三年には山崎東中学校が開校しました。

圃場整備事業が進む 奈良時代から残る条里制の遺構が姿を変え、農業の機械化・近代化が進む中で、昭和の末頃から平成の初めにかけて次々と田地が区画整備されました。昭和五十二年に着手した金

目次

明治以降の山崎の年表(十)	大谷 司郎	1
片岡醇徳の「家訓」と本條衛氏追悼	鎌田 裕明	4
山崎の芸術の流れ(三) 陶芸	伊藤 一郎	8
三木露風 露風と母かたのこと①	竹内 克司	10
菅野川の蛍	河本 雅規	13
空中写真と地図(その6)	清水 哲	16
播磨國完栗郡三方西作刀の国宝と御物太刀	片山 昭悟	19
会員・家族の文芸		23
事務局だより・研修旅行のお知らせ・編集後記		24
令和三年度・四年度役員紹介		25

谷地区、続いて河東北・河東南地区、下比地区、土万北地区等町内各地で圃場整備事業が進みました(総事業件数二六件、田畑実施総面積五四四ヘクタール)市役所農業振興課提供)。

山崎西中学校にコンピュータ教室できる 昭和六十一年に情報教育の先端を切って、生徒用コンピュータ二〇台を備えた特別教室ができました。当時としては画期的な取組みであり、この研究発表が皮切りとなり、順次各中学校にコンピュータ教室が設置され、情報教育が進められました。

まとめに代えて 「明治以降の山崎の年表」を当会報一二八号からスタートして今号まで五年をかけて、昭和六十一年(一九八六)迄の出来事を追いかけてきました。拾い切れていない事項もたくさんあるでしょうから、会員からのご意見や情報等をいただき、補強していきたいと思えます。

明治以降の山崎の年表(19) 昭和58年～81年

西暦年	和歴年	年	月	日	事項	出典等
1983	昭和	58	9	6	第194回町議会で議長に田中市郎氏、副議長に水谷雄氏が選任される。	広報やまさきNo.369
1983	昭和	58	10	1	山崎八幡神社新能が行われる。	神戸新聞S58.10.2姫路西播面
1983	昭和	58	10		大歳神社社殿及び休憩所、境内の秋葉神社が改修される。	神戸新聞S58.10.6西播面
1983	昭和	58	11	3	第2回山崎まつり(町民フェスティバル)が山崎小グラウンドで開催される。	広報やまさきNo.371
1983	昭和	58	11	26	～27 第9回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.372
1984	昭和	59	1	24	大雲寺境内のさずけ地蔵尊が再建され、落慶法要が営まれる。	神戸新聞S59.1.24西播面
1984	昭和	59	3	26	住民500人がデモ。(神河・蔦沢両中学校統合反対で)	神戸新聞S59.3.27西播面
1984	昭和	59	3	31	山崎中学校、菅野中学校が廃止となる。	議会だよりNo.17
1984	昭和	59	4	1	山崎中・菅野中の統合中学校、山崎西中学校が開校される。	広報やまさきNo.376
1984	昭和	59	4	6	山崎西中学校の開校入学式が行われる。	広報やまさきNo.376
1984	昭和	59	4	15	山崎西中学校の新校舎竣工式が行われる。	庁内広報666号
1984	昭和	59	5	6	兵庫やまさき第6回さつきマラソン大会が行われる。	広報やまさきNo.377
1984	昭和	59	5	30	山崎地震 大揺れの播州路 その一瞬座布団を頭に”走る地震の恐怖”	神戸新聞S59.5.31西播面
1984	昭和	59	5	30	9:39分山崎断層が震源の地震発生する。	四十七年の歴史(山崎町商工会)
1984	昭和	59	7	11	弥生後期の竪穴住居跡出土 土万小児童らが見学	神戸新聞S59.7.12西播面
1984	昭和	59	6	2	～4 第25回さつき祭りが山崎小学校グラウンド、町立さつきセンター、中鹿沢の元農業倉庫で行われる(人出8万人)。	広報やまさきNo.378
1984	昭和	59	9	3	第200回町議会で副議長に白谷敏明氏が選任される。	議会だよりNo.26
1984	昭和	59	9	17	農協ライスセンターが宇野に設置され、竣工式が行われる。	広報やまさきNo.381
1984	昭和	59	11	2	～4 第20回山崎町美術展が山崎小講堂で開かれる。	広報やまさきNo.381
1984	昭和	59	11	3	第3回山崎まつり(町民フェスティバル)が山崎小グラウンドで開催される。	広報やまさきNo.383
1984	昭和	59	11	26	公立宍粟郡民病院新館で診療が始まる。	広報やまさきNo.382
1984	昭和	59			関西電力総合技術研究所が太陽光発電システム実験場として山崎実験センターを母栖に建設する。	広報やまさきNo.382
1984	昭和	59	12	2	～3 第10回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.384
1985	昭和	60			山崎町で初の文化財指定 与位の洞門、陣屋門も	神戸新聞S60.2.10西播面
1985	昭和	60	3	10	元山崎ちびっ子会館 きょう待望の完成式	神戸新聞S60.3.10西播面
1985	昭和	60	3	12	父母生徒らに戸惑い、不安 山崎町の同盟休校 登校の子も浮かぬ顔 解決策なく長期化心配	神戸新聞S60.3.13西播面
1985	昭和	60	3		山崎西中学校体育館が完成する。	広報やまさきNo.386
1985	昭和	60	3		神谷地区2.2ha、下比地地区17.3haのほ場整備事業が完了する。	市役所農業振興課
1985	昭和	60	3	25	統合中の造成費予算 撤回求めデモ行進 可決して付帯決議	神戸新聞S60.3.26西播面
1985	昭和	60	4		老人大学かしわの学園と山崎高齢者教室を合併し、生涯教育大学かしわの学園として新発足する。	山崎町老人大学記念誌『足跡』総集編 神戸新聞S60.4.18西播面
1985	昭和	60	4		山崎藩覚帳文化財に 江戸中期の記録克明	神戸新聞S60.4.18西播面
1985	昭和	60	5	5	第7回兵庫やまさき全国さつきマラソン大会が実施される。	広報やまさきNo.389
1985	昭和	60	5	24	100年ぶり改修 泉龍寺延命地蔵堂 町内の地蔵めぐりも	神戸新聞S60.5.17西播面
1985	昭和	60			老人生きがい創造センター(鹿沢)が開設される。	広報やまさきNo.389

明治以降の山崎の年表(20) 昭和58年～61年

西暦年	和歴	年	月	日	事項	出典等
1985	昭和	60	6		冠婚葬祭の簡素化について全世帯アンケートや住民代表の協議がなされる。土万地区では簡素化の申し合わせ事項を作られる。	広報やまさきNo.391
1985	昭和	60	6	1	～3 第26回山崎町合併30周年記念さつき祭りが山崎小グラウンド、さつきセンター、花木流通センターで行われる(8万人の出入)。	広報やまさきNo.390
1985	昭和	60	8	15	神河、葛沢両中学校統合に向けた特集号が発行される。	広報やまさき特集号
1985	昭和	60	9	30	第207回町議会で副議長杉下繁氏が選任される。	議会だよりNo.30
1985	昭和	60	11	2	山崎町合併30周年記念式典が山崎西中学校体育館で行われる。	広報やまさきNo.395
1985	昭和	60	11	2	山崎町合併30周年記念号『広報やまさき』が発行される。	広報やまさき記念号
1985	昭和	60	11	3	第4回山崎まつり(町制合併30周年記念)が山崎小学校グラウンドを中心に実施される。	広報やまさきNo.395
1985	昭和	60	11	6	～8 生沢朗画伯の遺作展 出身地山崎で199点展示	神戸新聞S60.11.6西播面
1985	昭和	60	11	30	～12/1 第11回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.396
1986	昭和	61	2	9	第2回山崎町駅伝大会がスポーツセンター周回コースで行われる。	広報やまさきNo.396
1986	昭和	61	2	19	宍粟郡内の電話の市内局番が2桁(62.65.67)に代わる。	広報やまさきNo.397
1986	昭和	61	3	3	山崎町の同盟休校 今年も異常事態に 子供は自主学习町側登校求め家庭を訪問	神戸新聞S61.3.4西播面
1986	昭和	61	3	10	山崎町中学校統合予算を提案 定例町会「守る会」反発強める	神戸新聞S61.3.11西播面
1986	昭和	61	3	11	問題積み残し‘一時解除’同盟休校園 学校関係者らホッと 今日から通学再開へ	神戸新聞S61.3.12西播面
1986	昭和	61	3	25	山崎町上ノの岩上神社の夫婦杉(天然記念物)が県指定文化財になる。	しその文化財
1986	昭和	61	3		土万北地区29.5ha、清野地区8.6haのほ場整備事業が完了する。	市役所農業振興課
1986	昭和	61	3		最上山に散策道完成 ベンチや案内板も設置 森林浴を楽しんで	神戸新聞S61.3.11西播面
1986	昭和	61	4	1	年金制度改正により、20～60歳のはすべて国民年金に加入が義務づけとなる(1号被保険者は月額7,100円を納入)。	広報やまさきNo.398
1986	昭和	61	4	1	スポーツセンターに第2グラウンドが新設される。	広報やまさきNo.399
1986	昭和	61	4	7	菅野小学校校舎新築し、始業式が行われる。	広報やまさきNo.399
1986	昭和	61	4		清野地区新農業構造改善事業が完了し、集落営農組織ができる。	広報やまさきNo.399
1986	昭和	61	4		広域消防本部新庁舎が船元に完成する。	広報やまさきNo.399
1986	昭和	61	4	13	知的障がい者授産施設「さつき園」の10周年記念事業が行われる。	広報やまさきNo.400
1986	昭和	61	4		姫路市立梯野外活動センターにロッジが完成する。	広報やまさきNo.400
1986	昭和	61	5	4	第8回兵庫やまさき全国さつきマラソン大会が行われる。	広報やまさきNo.401
1986	昭和	61	5	31	～6/2 第27回さつき祭りが山崎小グラウンド、さつきセンター等で行われる(人出7万人)。	広報やまさきNo.402
1986	昭和	61	7	30	土万農業者健康増進施設が塩山に完成する。	広報やまさきNo.404
1986	昭和	61	9	1	(財)本多藩記念館が本多記念館図書館に「本多文庫」を開館する。	広報やまさきNo.405
1986	昭和	61	9	13	神河・葛沢の中学校統合特集号が発行される。	広報やまさき特集号
1986	昭和	61	9	18	第212回町議会で議長に高橋喜信氏、副議長に北川金治郎氏が選任される。	議会だよりNo.34
1986	昭和	61	11	3	第5回山崎まつりが山崎小学校グラウンドで実施される(人出1万人)。	広報やまさきNo.407
1986	昭和	61	11	29	～30 第12回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.408
1986	昭和	61	12		山崎西中学校にパソコンが配備されたコンピュータ教室ができる。	広報やまさきNo.407
1986	昭和	61	12		山崎町春安に一般廃棄物不燃廃棄物埋立処理場が完成する。	広報やまさきNo.408

片岡醇徳の「家訓」と「敬」 そして「平成」の課題と本條衛氏追悼

鎌田裕明

令和三年、水温む三月七日、梅香る頃、本條衛氏（九一歳）は住み慣れた自宅で梅の古木を愛でながら家族に見守られ、安らかに逝かれました。心から哀悼の意を表します。

拙稿では氏の長逝を機に、第一部でかねがね私に求めておられた片岡醇徳の「敬」論を紹介し、若干の解説を加え、続いて第二部で氏が会長をされた頃「平成」の山崎闇齋研究会の様子をとりまとめ、山崎の文化高揚に寄与された時代を想起したいと思います。

片岡醇徳（一六二八〜一七〇八）は闇齋先生（一六一八〜八二二）から遅れること一〇年の寛永五年、山田町の町年寄米屋六兵衛の子として生まれました。その略伝や著書については、島田清氏①の校訂になる『宍粟郡守令交代記』に併収されている「守令交代記の研究」②に詳しく、他にも山崎郷土研究会長の大谷司郎氏③の論考や昭和五二年発刊の千二百頁を越す大著『山崎町史』からも概要を知ることが出来ます。ただ「敬」を始め儒学関連の著作への評価や分かりやすく平易な解説はすくないように思われます。

第一部 本條衛氏は、「郷土の発展には、その文化や歴史を学び、学びの中から未来への方向をつかみ、担い手としての気概を充実させ実践を進めることが大切である。山崎に縁のある闇齋先生について学ぶのもこのことに由るのです。」と常々語っておられました④。

片岡醇徳は将にこの意味で学ぶべき好個の対象です。

一の1 片岡醇徳の「家訓」⑤について

宝永五（一七〇八）年、三百余年前としては希有な高齢期（傘寿・八〇歳）の醇徳は、宍粟の地誌を郡境、郷、城、市、山川、官社、寺院、土産、地勝、風俗、人物の項に分けて説明した『宍粟郡誌』を書き上げています。『郡誌』の序文には「春來、衰病の難にかかり、重い衰弱の身となった。」と終焉の予感を記しています。そして同じこの年の三月、「我が子孫たるもの、及び後來の者、私を知ろうとする者」の為に「家訓」をしたためるのです。

「家訓」の概要

島田清氏の読み下し文により概略を紹介すると次の通りです。（醇徳の漢文で書かれた原文は注⑦⑧の示すとおり、漢籍から適切に引用されています。声に出して読むと音声の迫力と表意文字の深さの二重効果で、強いインパクトを感じます。なお読み下し文が難解な箇所は私見により加筆修正しました。）

「人の生死と富貴は天命である⑥」。天から享けた性を養い、磨き、理を窮め行動するようにという文で始まります。

日常は仁と愛を本にし義に従って行動することが大事である。行動は氣（氣力）に支えられ義と道から離れられない。孟子はこれを浩然の氣といっている⑦。道とは本体を失わず事に応じ、物に接する中で発見されるもので、四書五経に詳述されている。この教えを尊び、信じ、怠らず生活に貫くことだ。

昔から人は、死を免れ得ないのである。「朝に道を聞けば夕べに死んでもよい。ただ正しい真実の道を得て死ぬことだ⑧。そして「一

方的な適否でなく筋の通った義に従うこと⑨」と、死生富貴は天命であり、思うようにいかなかったからとて「天を恨み人を咎めず、身近な学びから深遠な学問にすすむこと⑩」だ。これらのことを家門の法として失わぬよう努めてほしい。以上が所謂「家訓」前編です。

一の2 「家訓」追加文Ⅱ「敬」〜日用常行の要（かなめ）

醇徳は宝永五（一七〇八）年三月に前述の「家訓」を書き終えました。傘寿（八〇歳）の記念として大仕事でした。この時、醇徳の思いは次のようなものだったと思われまます。「今書き上げた家訓には、何か欠けている、道や天命の根底にある更に基本的なものが」。それは青春の学びの時代、醇徳と一つ違いの師であり儒学に蘊奥を究めた畏友であり師である中村惕斎（一六二九〜一七〇二）、そのもとで学んだ『論語』と『大学』に通底する「敬」についての論述でした。

風薫り最上山の新緑が映える五月、醇徳は「敬を以て日用常行の要となすを言う」と題する「家訓」追加文を完成させました。

凡そ、毎日の行いの上で、何をおいても学ぶべきことは、「敬」の一字である⑪。「敬」は心をつかさどる中心であって、万事の根本である。このことを日常の言動では少しの間も忘れてはならない。おろそかにしてはならない。努力すべきは『小学』の教えを知ることから始め、『大学』の教えの学びで終わると心得ることだ。これを疑いを持たずひたすら努めることだ。こうすることが物事の根本を明らかにし、その本質を究めることへ格物究理になり、徳を尊び学びを教えることになるのだ。このようにして徳と仁が身につく

と、言動は全て核心を突くへ道に中（あ）たる⑫〜ことになる。

中道には究理・正心が前提である。始めは概念や実態の大きなものを描定して、次に小さいものに移ることだ（平天下、治国、齊家、修身、正心、誠意、致知、格物の順）。この八条目の実践には敬の心が不可欠である。一日も「敬」を離れられないのだ。ここから「敬」の一字が「聖学（『論語』や『大学』・『中庸』などの学び）の要（かなめ）」になるということだ。

「敬」に係る説明は「百聖伝心の要」（史上の聖人が儒学の精髓として語り伝えたキーワード）として、堯や舜の名言が『書経』や『論語』の中で燦然と輝いています⑬。

経世の徳を身につけるに「人之心惟危、道之心惟微、惟精惟一、而允執其中矣」（人の心はこれあやうく、道の心はこれびなり。これせい、これいつ、しかしてまことにそのちゅうをとれ⑭）は数ある名言中の白眉です。この文は『書経』大禹謨からの引用で、阿部隆一は「朱子学では心法上最も重んじられた箴言」とべたほめです⑭。ここはわかりやすく書くこと次のようになります。

人の心は欲が混じっているから危険であり、道の心は純粹精妙であるから微妙なことに動じやすい。だから人心と道心の区別を精密に、一途に努め、かくて中を執り守れ。

これは舜が禹に国権の授ける際に語った言葉であり、国事にかかると基本的態度なのですが、個人の日常の暮らしにも拡大解釈されていくのが儒学の特徴です。人間の弱さともろさを「危うし」と認めたと上で、一途に公正な判断に努めよと励ましています。共感と支援のやさしい心が感じられます。

以下、『書経』堯典、『論語』憲問四二章、顔淵二章・一五章などからの引用が二頁に亘って記されています。

これらはそれぞれ身を修め、徳を身につけるための一句であり、心の中心になるもので、口誦・朗読すれば心安らかに穏やかになるものである。熟読玩味し、真摯に努め、励めよ。

終わりに、今、思っていること。

「精一執中日用常。更無適莫義之隨。」島田清氏は「精一執中日用常なり。更に適莫なし、義之に隨う。」と読み下しておられます。これは『論語』里仁第一〇章の「君子之於天下也、無適也、無莫也。義之與比。」です。加地伸行先生苦心の名訳をつけておきます⑮。

君子（教養人）の世に於けるありかたは、一方的な肯定（適）もなければ、一方的な否定（莫）もない。ただ筋の通ったこと（義）、それだ、それに従う（比）までだ。

いよいよ最後に醇徳は自分の言葉で書いています。死生有命予不与。彼楽天心何又疑。觀來窮達有天命。生理具心務利仁。一切外榮何又顧。安遇触処楽天心。私も自分流に解釈を書いておきます。

死と生は天の命ずるところで自分の与らないこと、天の心を楽しんで何を疑うことがあろう。榮華と貧は天の命ずるところとずっと観てきた。生きることは心に利と仁への努めを具へること。全てのうわつらの榮耀は意に介さない。ときには天心を楽しもうではないか。（利仁は『論語』子罕第一章の「師は利をいうときは命や仁とともにであった」を踏まえています。

注

①島田清。県立山崎高等女学校、山崎高等学校教諭。（昭和一八年～二三年）兵庫

庫県教育委員会社会教育主事等（昭和二四年）。兵庫県立教育研修所次長（昭和四五年）。姫路学院女子短期大学教授（昭和五五年）②島田清『守令交代記の研究』山崎郷土研究会が島田氏校訂『守令交代記』を復刊し、これに収録されています。

③大谷司郎「郷土史研究の先駆者・片岡醇徳の足跡」『山崎郷土会報』第123号

④本條衛。平成二四年一月四日の「『山崎閣斎研究会』創立十五周年記念講演会での会長挨拶」から⑤片岡家「家訓」注③の五八～六五頁⑥孔子『論語』

顔淵第五章に死生有命、富貴在天とある。以下この種の引用が頻出する。⑦「孟子」公孫丑二に「其為氣也、配義與道、無是、餒也、是集義所生者」とある。⑧

「論語」里仁第八章にある。⑨「論語」里仁第十章にある。⑩「論語」憲問第三章にある。⑪「敬の一字は儒学の始めを為し終わりをなすの工夫」『閣斎先生講説（「敬斎箴講義」の冒頭）』緒言は練られ、含蓄に富んでいます。⑫「中庸」の

中庸章句序の二節。島田慶次「大学・中庸」朝日新聞社昭和四三年版一四四頁の解説が抜群におもしろい。⑬山崎閣斎『敬斎箴講義』岩波書店・日本思想大系31巻・1980年版の八〇頁に詳しい。⑭山崎閣斎『前掲』の阿部隆一の注・九五頁

⑮加地伸行『論語』全注訳、講談社学術文庫2012年版八七頁（私は義と天命が同義になる可能性もあるのでは、と思います。

補説（中間のまとめにかえて）

『家訓』は、山崎藩の町年寄役が『論語』を始め『大学』『中庸』などからの自在な引用に満ちています。また、数年来の準備があったとしても著述は三百余年前の八〇歳の時です。江戸時代播磨山崎の偉大なる知性に敬服です。

第二部 『平成』の課題と本條衛氏追悼

山崎の文化高揚に貢献された氏の業績は次のとおりです。

二の1 学習資料の作成

十六年前の平成一七年三月、多様な学びの冊子資料『山崎闇齋』が牛尾弘孝大分大学教授の執筆により完成しました。A四版縦書き六八頁です。内容は闇齋先生の生涯をカラー写真や資料を随所に配し、脚注と年表をつけてわかりやすく書かれています。高い完成度を備えた学習資料です。巻末に「この冊子は郷土山崎において闇齋先生の功績発掘に情熱を注いでこられた山崎町郷土振興会会長本條衛氏のご尽力に依ります」と謝辞があります。

刊行に当たり本條さんは神戸新聞の記者に「現代社会は専門化、分業化が著しく進展していますが、根本の『人間の生き方』は、郷里に親近感ある偉人の歴史に学ぶことが最適と思われます」と語っておられます。このスタンスは数多い講演会の企画に継承されていきました。

二の2 講演会の開催

生涯学習時代の学びの手法の一つに講演会があります。山崎闇齋研究会会長ややまさき文化協会副会長として講演会を総括されて開催された講演会は一〇指に余ります。例えば、平成二四年一月四日、山崎文化会館中ホールでの加地伸行大阪大学名誉教授の講演会は、日曜午後二時という条件下で参加者は二〇〇名を超えました。高名な加地先生の、時代の課題と地域の



本條衛会長の挨拶

関心に応える「『日本の家族』の再建と山崎闇齋」という講演会でした。私は多数の参加者が居る山崎の風土の豊かさを実感したことでした。

二の3 「崎門学派の系譜」・パネルの作成

この資料は平成二九年四月、本條衛前会長（当時八八歳）が寸暇を惜しみ、多くの文献を渉猟され、数多の朱子学者の学説を分析・検討し、闇齋先生の系譜に連なる一八〇名をそれぞれ位置づけ、一覧にまとめられた力作です。闇齋学の権威であり中国哲学史専門の大分大学名誉教授牛尾弘孝先生の監修を得られて、この度の発表となりました。私は寡聞にしてこれだけ多数の学者を系譜ごとに整理した資料は初見です。改めて氏のご精励に畏敬の念を禁じ得ません。

終わりに

資料を整理していると、本條衛さんが米寿を過ぎても、後ろ姿で研究会をひっぱってこられた実績が多かったことに改めて驚きます。私たちはそのたびに、感動し、鼓舞され、いい出会いの時を過ごしてきました。そしてそれらの一つ一つが、結果として人びとの文化や歴史への関心と理解を深め地域が豊かになっていく力になるのを願いながら。

いつか幽明境を超えて本條さんにお会いすることがあれば、古代の香りを再現した実粟の銘酒を楽しみながら、闇齋先生の漢詩や『敬齋箴講義』談義に花を咲かせたいと密かに願っています。

山崎の美術の流れ (三) 陶芸

伊藤 一郎

『日本史の新常識』（文春新書）という本によると縄文時代は、一万六千五百年前より始まったとされています。二〇〇五年に岡山市彦崎貝塚より六千年前の地層から大量のプラントオパールが発見され、縄文時代にすでに稲作が始まっていたとのことです。山崎歴史郷土館には、縄文時代の与位高尾遺跡にて発見された深鉢が展示されています。また、一九六〇年に岸田の旧神河中学校前の道路から、備前焼の壺に入った大量の古銭(中国銭)が出土しています。中世には、火災や戦乱・盗難などから財産を守るために土の中に隠す習慣があったとのことです。このことから、中世には、宍粟市と備前との間に行き来があったのでしよう。

当町における本格的な焼き物は、幕末の藩主本多忠鄰の時代に、初代陶工坂根栄治郎が元山崎の源ヶ谷に窯を開き、壺・花瓶などを焼いたようです。栄治郎は、鳥根県江津市より出稼ぎの陶工として備前伊部の窯元で働いていた村本佐市を引き抜いて来ました。佐市は、源ヶ谷で働くうちに二代目栄治郎の養子となり、三代目を継ぎ最後の陶工として、昭和の初期まで作陶に従事しました。山崎町鹿沢にて華道師匠の故小嶋千代子氏が寄贈された山崎焼が山崎歴史郷土館にあります。私が二十代の頃、たつの市の食堂で山崎焼の一升徳利を見た事があります。いい作品だと思いました。揖保川筋には、一升徳利が広く販売されていたのでしよう。

山崎焼を再興しようとしたのが、藤井山陽氏です。姫路市生まれの山陽先生は、一九七三年にやまとやしき百貨店美術画廊にて作品展を開催されました。私は、その作品を見て深い感銘を受けました。まさか山陽先生が、山崎で作陶されるとは思ってもよらなかったのですが、一九八八年に元山崎にて工房を持たれました。山陽先生はニューヨークで穴窯を作り、作陶・焼成の指導をされた後に、山崎町ジャスコホールにて個展を開催し、二〇〇〇年には山崎文化功労賞を授賞されました。山陽先生は、やまさき文化大学の陶芸部の指導をされてきました。今の美術協会の陶芸部の理事は、岡田忠彦氏で山陽先生の流れを受け継いでいます。山陽先生は、山崎焼の復興を目指し、源ヶ谷の山手に穴窯を自費で作られ、火入れをする前の二〇〇三年に亡くなりました。市も、この穴窯を利用して、山崎焼が再興できないか、検討を重ねてきましたが、再興にはいたりませんでした。

一九九六年に東大寺長老の清水公照先生ご夫妻が山陽先生の工房に來られ、山陽先生の作られた大皿に、清水公照先生が字を描かれた大皿と記念写真を掲載します。

山崎の陶芸については、戦後友澤澤医院进行業されていた友澤庄二先生が自宅に電気窯を設置し、黒楽を作陶されていました。また、前衛書道で有名な田内龍陽先生が備前風の太皿を作陶されていました。現在陶芸で活躍されているのが、千種町の当麻嘉英氏・波賀町の植田禎彦氏・山崎町では、金谷の片山新氏・高下の里見亘氏・鹿沢の富和孝氏・宇原の出口郁子氏・塩山の中石壮一氏がおられます。



藤井山陽先生の穴窯（源ヶ谷）



山崎焼（源ヶ谷焼）石碑



東大寺長老清水公照ご夫妻と藤井山陽先生



清水公照先生直筆「平安」



清水公照先生直筆 大皿（藤井山陽先生）

三木露風 露風と母かたのいよ①

竹内 克司

三木露風に興味をもったきっかけ

昭和の中頃現在の宍粟市役所（山崎町中広瀬）の地に東洋建材工業の工場があった。幼少の頃、揖保川の水遊びの帰りに、その工場の高い煙突から黒い煙が立ち昇るのを見て、その煙が増え続け雨雲となり明日の旅行に雨が降らないか心配したことを覚えている。

この東洋建材の工場は、郡是製糸山崎工場の跡地に建てられたもので、焼却炉と煙突は引き続いて使われていた。山崎町の近代産業を語る場合この郡是製糸での生糸生産・養蚕業を抜きに語るわけにはいかない。蚕といえは食草の桑葉が大量に必要で多くの桑の木が郡内には植えられていた。当時の子供たちは赤黒く熟した桑の実を食していた。その桑の実については、露風の童謡「赤とんぼ」の歌の第二小節の「山の畑の桑の実を小籠に摘んだはまぼろしか」がある。



三木露風（霞城館蔵）

る。当時、生糸生産のピーク時には宍粟郡や佐用郡の農家の半数が繭づくりをしていたといわれている。養蚕業の繋がりで、赤とんぼの歌より露風に興味を抱き始めているさなか、『山崎新聞』（大

正四年（昭和十四年）が、創刊者の山下家（葉種商「あわや」の親族の蔵から製本された形で見つかり、宍粟市歴史資料館のもの）と合わせると発行部数の多くが揃った。その新聞には露風が二年半にわたる寄稿（一六〇回程）した詩歌、紀行文等が掲載されていた。平成三十年度の宍粟学講座で、「露風も寄稿した『山崎新聞』とその時代」と題した高田智之氏（ジャーナリスト・元共同通信社記者）を受講したことや、平成二十九年たつの市において「赤とんぼの母碧川かたを朝ドラの主人公にする会」が発足するなど、一連の動きが露風とかたに興味を持たせてくれた。

童謡「赤とんぼ」が生まれた背景

赤とんぼ 三木露風作詞、山田耕筰作曲

夕焼け小焼けの赤とんぼ 負われ見たのは いつの日か

山の畑の 桑の実を 小籠に摘んだはまぼろしか

十五で姐やは 嫁に行きお里の便りも 絶え果てた

夕焼け小焼けの 赤とんぼ とまっているよ 竿の先

日本人なら、赤とんぼの作詞、作曲家の名を知らなくても、歌は知らない人はいないだろう。たった四小節の平易な詩に郷愁の想いが込められ、もの悲しいメロディーが哀愁を誘う。そこから浮かび上がる情景は昭和の時代を生きて来た人々の原風景そのもので、日本人の心に深く染み入り、永遠の名曲として歌い継がれている。この童謡が生まれた背景を知るため、露風の故郷龍野町と露風の生い立ちを探ってみた。

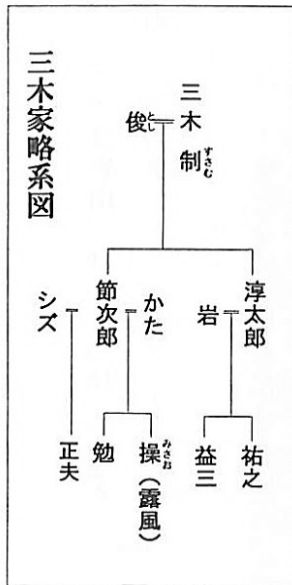
露風の幼少期・少年時代

この赤とんぼ詩は露風が生まれ育った揖保郡龍野を追慕してできたもので、露風の生い立ちと深く繋がっている。露風の本名は三木操。父節次郎（二十四歳）とかた（十七歳）の長男として明治二十二年（一八八九）六月二十三日揖西郡龍野町（現たつの市）に生まれた。鶏籠山の麓、龍野城の武家屋敷の一角で紅葉谷、聚遠亭、龍野神社が近くにある。満五歳のとき、父母が離婚。離婚の原因は、父が家を顧みず放蕩な生活が続いたため、祖父制が、かたを不憫に思い離婚を勧めた。かたは乳飲み子の勉を抱えて、鳥取県鳥取市の養父母の堀家に身を寄せた。操（露風）は近くの祖父に引き取られ養育された。

家のほんの近くに十文字川が流れその川伝いに紅葉谷がある。その谷を上り詰めたところに両見坂峠があり、母はこの道を通り龍野を後にし因幡（鳥取県）に向かった。操は幼稚園から帰ると母はずでにいなかった。その日以来なくなった母を来る日も来る日も待ち続けた。

われ七つ因幡に去ぬ御母を 又かえりくる人と思ひし『文庫』三十卷 明治三十八年十月 露風十六歳

桑の実や梅の実を数
えては母の帰りを待つ
切ない日々が続いた。
「遊び場は山か谷か或
いは河かであった。」
「一人で山に登るのが



三木家系図

好きであった。」と露風は述懐している。操が小学四年生のとき

「或日、独り、台山と称する町の西方の峯に登り、山づたいに昔赤松円心が立て籠った城の山に行き、さらに北嶺を越えて、路のなるところを跋涉し、北五里程の山崎地方に下山した。其の為、私の家では、一日、私が姿をみせないでゐたので憂慮したが、無事に帰ったので、父と祖父とから、其の豪胆なことを褒められた。」（『わが歩める道』より。）とある。

この鶏籠山から城山城跡への縦走は私も一度経験しているが、このコースだけでもけっこうきついのにさらに北嶺を越え、道なき道歩き山崎まで行き帰途に着いている。初めての山野を一人で歩き通したことは驚きであるが、山河を友とする操にとっては楽しみの日常であったのだろう。このルート上の山々についていくつかの詩が残されている。

山づたい

ひとりさみしい山づたい、わたしはきょうもさがします。見たこともない「幸福」を。山のむこうのまたむこう。空のむこうのまたむこう、わたしはいくつ越えてきた。

わたしがさがす「幸福」は、山のいずこでうたうやら、谷のいづくにすまうやら。知らない山をあおぐとき、知らない谷をのぞくとき、わたしの胸はふるえていた。赤い夕日が照らすとき、山の緑にせずむとき、山には何の音もない。わたしは鶴の巢のそばで、鳥の卵を抱いていた。なみだながらに抱いていた。

童話集「真珠島」

お山の上

高い、お山の上へと、登る。ここは岩山、けわしい径みちよ。鶺鴒を、見たいが、その鳥、おらぬ。「鶺鴒の巢」という、名をもつ、山よ。遠い山々、峯から見えて、上には、青い空が、ある。

青い、高い、あの空よ。ここは、人気のない、いただきよ。

峰に、しげった樹のあいだ、行き、道の無い山、なおあるく。

高い、お山へ、のぼった日おば、大きく、なって、私は、懐おもう。

あかとんぼの歌詞にある姐やとは、六粟郡（現六粟市）山崎町の人で、三木家に奉公し操の子守をしていた。母が去った一年後姐やは嫁入りし三木家から去っている。操は、母が帰ってくるのをただ待つのみであったが、ある日北に向かった。北の山づたいには母の住む因幡がある。やさしかった母や姐やの影を求めめるかのような「幸福」探しが、山崎町までの行動に繋がったのではないかと感じられる。詩に出てくる「鶺鴒」という鳥であるが、

この「鶺鴒」の字は白鳥を表すが、場所にコウノトリのことと思われる。操が巢のそばで、卵を抱き涙したわけは？ 鶺鴒の巢という山の名から、卵と我が身をイメージしたのか。難解である。この行動は操の母恋の想いが起因したものであったのである。うが、無事帰ってきたことで、豪胆という褒め言葉で決着した。ひとりぼっちの彼の心を静め寂しさを忘れさせてくれたのが播



鶺鴒の巢山 三木家の北西に見える

磨龍野の山河であり、それは操を詩人として醸成させるには充分な自然環境であったのだろう。

露風の少年・青年期

露風は明治二十八年、六歳で龍野尋常小学校に入学。祖父より漢字や習字を教わる。

・明治三十六年、十四歳で龍野中学に入学、文学に凝りすぎて翌年岡山県の閑谷黌しずたこう（学校）に転学するも八か月で退学した。そのころ姫路の「鷺城新聞」に和歌・詩を投稿

・明治三十八年、十六歳、閑谷黌を退学して直ぐに、処女詩歌集「夏姫」を刊行し、同年石川啄木（十九歳）の詩集「あこがれ」、野口雨情（二十二歳）の詩集「枯草」等の若き詩人たちの処女出版の中で、ひととき好評で若干十六歳の若き詩人露風が詩壇に迎えられた。この後、姫路市出身の有本芳水を頼って上京し、そこで若山牧水、北原白秋等多くの詩人と交わる。上京してからの露風の短歌には母かたを恋い、故郷の龍野を懐かしむ作品がいくつも見られる。

悲しき日雪国なれば日おくれてぬれてとどきし母の文かな
夜ぞ恋し涙の中にふるさとの桑摘む家の眼にうかび来て

（明治三十九年・新声）

・明治四十二年、二十歳、「廃園」を発刊し、詩壇の地位を築き、北原白秋と肩を並べ、大正時代まで白露時代を築くことになった。

※ 次回露風のその後と、母かたについて

参考『三木露風全集』、『露風の童謡』、『露風と碧川かた』他

【菅野川の蛍】

河本雅視

はじめに

今年も蛍のシーズンは終わりましたが、皆さん蛍狩りに行かれましたか。沢山飛んでいたでしょうか、私も近くの菅野川へ行き、橋の上から蛍狩りを楽しみました。しかし、今年はなぜか例年より少し少なく残念でした。場所によって、或いは川によっても違います。皆さんの所はいかがでしたでしょうか、沢山の蛍が乱舞し、その一斉明滅の光景が見られたらいいですね。

一、ほたるの生息地

蛍はどんなところに生息するのでしょう。

蛍もやはり自分に適した生息地があります。

それは蛍の一生を見ると、
蛍一匹が小さい〇・五ミリ程の大きさの卵を四〇〇個程、

川岸のコケに生みつけ、ふ化すると水中へ移動します。

続いて水中生物にとって大切なのは、生物が生育していくためには適した環境と、その生物の食べ物が必要です。

蛍の幼虫は水中で過ごし、カワニナを餌にしますが、その流れの



挿絵① 蛍狩り絵図

中に、カワニナが生育している事が大切です。そしてまた、その水の中に沢山の空気が溶け込んでいること、つまり、溶存酸素量の多いことも大切です。

二、水中の溶存酸素量

川をよく注意して見ますと深く水がよどんだ所と、浅く、さざ波が立った所がありますが、このさざ波立った所は空気に振れやすく、沢山の酸素が水に溶け込み溶存酸素量の多い水流となります。

また、水温ですが、水は温度が高くなると溶存酸素量は低くなり酸欠となります。夏の日射がきつくなりますと、流れが浅く緩やかな所は水温もすぐ上昇し、溶存酸素は少なくなってしまうのです。水温が二五℃以上になれば酸素が欠乏して蛍は皆死んでしまうのです。しかし自然はうまく出来ていて岸辺や川底から冷たく溶存酸素量の多い湧き水が湧き出して、それらの欠点をカバーしています。

そしてまた、湧き水の有るところは竹藪が多く、蛍はそのような環境で生育しています。



挿絵② カワニナ

三、蛍觀賞地

菅野川にも昔から毎年六月上旬から中旬ごろ沢山の蛍が飛び交いますが、菅野川は蛍の発生には大変適した川のように思います。

(一) 上流での蛍觀賞

上流の塩田地区での事です、塩田明証寺で「胡弓の夕べ」と言う演奏会がありました。その演奏会が終わるころ、日も沈み暗くなりかけたので、ちょうど、ほたるシーズンの頃でもあり、演奏会が終わった後、近くの川へ行き、ホタル觀賞をしました。

ところが、自分で思っていた以上のものに出会え感激でした。川岸に腰を掛け、ジーと蛍を眺めていたのですが、川のせせらぎと共に、懐かしいカジカガエルの快い響きに出会えました。胡弓の余韻と共に贅沢なひと時でした。

また、空を見上げるとこれまた不思議、今まで星と一緒に蛍を見たこともなかったのですが、蛍が高く飛んで、星と一緒に見られたのです。

これは蛍の習性で、蛍の飛ぶ高さは周辺の高さによって違うようです。草地では極低く群舞し、竹藪等の木立があればそれなりの高さに飛翔します。ここ塩田は近くに山があるので随分高く飛ぶようです。



挿絵③ 塩田明証寺横の川筋

(二) 中流での觀賞

青木の門口橋の下流には、かつては竹藪があつて蛍の群生地があり、沢山の蛍が乱舞していた場所がありました。

ある初夏の夕刻、台風による洪水があり、蛍が心配になって、風雨がおさまりかけた頃、多発生地へ車を走らせました。洪水はやはり濁流となって岸の上部まで来ており、いつも沢山光っていた場所も、流れが上昇しておりましたが、蛍のほうも上部に避難して、低木や草むらの中へ非難し、何千という光を明滅していました。暗闇の中で濁流を前にしてその光景を見つめていますと、時々上流から波しぶきの中を光の筋となってスーと一筋、また一筋と流れていく光があり、そして中には流れからさっと飛び立つものもありホッとしたり、またそのまま流れに飲み込まれてしまうものもありました。蛍がなぜ流されるのかと、じつと見ていますと、蛍が葉から飛び立つとき、自分の重さのためか少し下降しながら飛び立っていました。そのため水面近くから飛び立つ蛍は、やむなく濁流に飲まれていったようです。

ところで現在は残念ながら、その発生地であった処は、竹藪も切り払われ、そのうえ中国縦貫道からのナトリウム灯の黄色の光がとどき、



挿絵④ 縦貫道ナトリウム灯

蛍は一匹も飛ばなくなってしまいました。

このナトリウム灯の光は昆虫が来ない利点がありますが、蛍にとっては大きなダメージを受けることになりました。

人間中心の世の中はよく考えないと豊かな自然を破壊していくこととなります。蛍観賞の場所もここでは失われてしまいました。

また、中流の高下地区は全体的に大きな河川工事が行われ、川岸の竹藪は無くなり、見通しの良い河川となりました。また、川岸は生物の環境を守るように、隙間のあるコンクリートブロックを使用して、その奥には河原石を詰めて水中生物が出入り出来る工夫がなされています。蛍の幼虫などもこの中を利用して成虫になり飛び出す事でしょう。しかし、ただ問題は、岸辺に竹藪や樹木がなく低い草原となったため、塩田地区で述べましたように、蛍は周辺の竹藪や樹木の茂った高さまで、それをバックに高く飛び立っています。それが無く葦草などの草原では葦草の高さ程度の低い処を飛んでいます。



挿絵⑤ 護岸工事

(三) 下流での観賞

木谷橋から下流は、菅野川一番の蛍名所で、沢山の蛍が乱舞しています。

対岸は竹藪があり、また、蛍・カワニナにとって大切な湧き水が豊富に湧き出しているようで理想の場所のようです。

しかし、ここも残念なことに、鶴木橋の袂にたいへん明るい水銀灯が設置され、蛍にとって大きなダメージを受ける事になりました。

蛍は自分の小さい光で相手と交信を交わし、生きていますが、蛍は水銀灯の明るさでは全く交信は取れないでしょう。

とは言っても、これは安全面から仕方がないことではありますが、出来れば街灯のカバーの向きを少し考慮出来ないものかと思えます。

以上菅野川の蛍発生地を記してきましたが、菅野川も以前に比べずいぶん少なくなっています。もう一度、皆様の力によって、昔の菅小校歌にあった、『流れも清き菅野川』であり、蛍いっぱい菅野川であってほしいと思います。



挿絵⑥ 加生、蛍発生地

二 五十波の旧道

会報一三四号で、「三津や田井の旧道は歩くことが出来るが、五十波の旧道はよくわからない」と書いた。あとから考えたのだが、因幡街道は五十波では揖保川右岸に出来た低く細長い自然堤防の上を通っていたのではないかと思う。そして、その因幡街道のほぼ上に国道二〇号線、さらに国道二九号線が盛り土されて出来たので、わからないのだと推測する。

三 城下に残る旧河道の跡

しまむら山崎店の駐車場から東に神社の森が見える。その手前に段差らしきものがある。気になって山崎生コン工場付近から段差の側の用水路沿いに歩くと山崎自動車教習所にあたる。そこから東に進み神社の境内に入る。雨祈（アメイノリ）神社には初めて来た。

国土地理院の「ベクトルタイル地形分類（自然地理）」によれば、しまむら店から東に見える段差は、揖保川の旧河道の跡のようで、雨祈神社は自然堤防上にあるとのこと。

一九四七年十一月の米軍空中写真（写真③）では城下平野には建物も少なく、旧河道や段差も田の畦のくねりから推測可能である。しかし建物や道路がどんどん増えていく現在では、もとの地形の痕跡は所々でしか確認できなくなったと思う。ただ、昔の田畑も畦も用水路も人間が作ったものだと言えそうなのだ。

今の郵便局本局付近に住む人から、終戦後しばらくはここから御名の西光寺の屋根瓦が直に見えていたと聞いたが、人家もまばらな時代の空中写真を見るとそれがよくわかる。

中井や鶴木の集落は自然堤防（微高地）上にあると聞いていたので、あの辺りを通る度に何かの痕跡をさがすのだがわからない。



写真②しまむら店から神社を望むと段差が見える



写真③ 1947年の空中写真

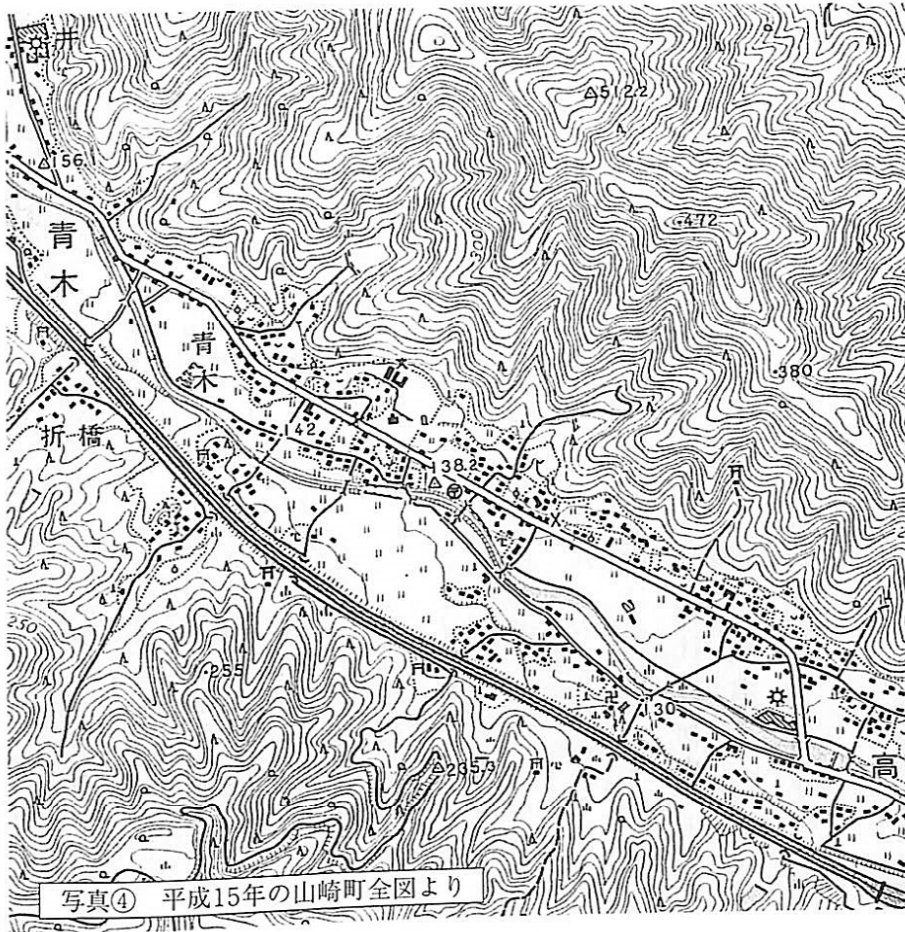
四 菅野の段差

菅野の青木から高下にかけて車で走ると、三回スッと下がるところがある。塩田の入り口から約五百メートル南、宍粟市基盤地図では現道路の標高は約一五一メートルだが、火の見櫓から藤多医院にかけて数メートル下がる。次に青木郵便局を過ぎてしばらくして再び下がる。そして庄家を過ぎて高下公民館にかけてまた下がる。

その理由を考えているうちに、山から流れ出た土砂が堆積したところによるのではないかと思うに至った。どこでも言えることだが、谷があれば、その凹んだ部分の土砂等が流れ出て堆積しているはず

で、そこは他の場所より少し高くなる。

宍粟市基盤地図によれば、塩田の入り口の南方では山側から宮ノ元川が流れ出ている。次に青木郵便局辺りには谷畑川が流れ出ている。庄家の北には東諏訪神社の谷筋があり、枝尾根の先まで堆積物により高くなる。素人考えによるこじつけになったかも知れないが、許していただきたい。



五 生活環境の記憶

(一) 以前一三五号で、生活の中の当たり前のことは特に記録されにくいので、人々の記憶が途絶えると後からは極めてわかりにくいと書かせてもらった。私が書いたことのいくつかは、偶然地元の人に話しかけ運良く聞いた事柄であり、よそ者の私にとっては新鮮な知識だった。しかしそれぞれの地元の人にとって当たり前の常識だった事も、世代がかわるうちに消えるかもしれない。昨年より新型コロナウイルスのため、人に話しかけてあれこれを尋ねることは少し難しくなっているが、また元に戻ることを願っている。

(二) 今まで自分が関心を持った生活環境について、『山崎郷土会報』の総目次を参考に過去の論考をたどってみた。

地質時代の山崎、ある村の旧道、人の背・牛馬や高瀬舟による特産物や生活物資の輸送のこと、用水のことに関する論考もあった。またここ数十年の国道沿いの変貌・宅地造成による新しい家並みの出現などを取りあげた論考もあった。

よく目立つテーマは赤松氏・宇野氏・長水城攻防・近世山崎藩の大名・城下町などだが、それら以外にも驚くほど沢山の事柄が書かれていると感じた。

(三) どんな小さな事でも、この地域について気付いたことを書いて会報に載せてもらっておけば、会報は図書館に置かれているので後々必ず誰かが読んで関心を持ち、参考にしてくれると思う。

播磨国完栗郡三方西作刀の国宝と御物太刀

片山 昭 悟

はじめに

今から約七〇〇年前の鎌倉時代に播磨国宍粟郡三方西（現在の宍粟市波賀町小野付近）で、国宝の太刀や皇室の所蔵の御物太刀が作刀されていたことが、次の資料からわかります。

私の担当した宍粟市波賀町の調査では、これまで波賀城跡の発掘調査で、石垣遺構が残存していました。ほ場整備に伴う埋蔵文化財確認調査は、小野、谷、斎木でさせていただきました。兵庫県教育委員会の小野段林遺跡の製鉄跡の発掘調査に参加させていただきました。野尻八幡神社で発見された松喰鶴鏡（平安時代末から鎌倉時代前期）の調査にも参加させていただきました。昭和四十五年（一九七〇）九月に兵庫県青年国内研修で埼玉県の秩父地方の長瀬や三峯山を訪れたことがあります。

平成三年（一九九一）八月十六日に東京の上野にある東京国立博物館に金谷鏡の調査で訪れた時に、十七日にさいたま市大宮の埼玉県立博物館を訪れて、国宝太刀について詳しくご教示いただき、宍粟郡から訪れたことを伝えました。その後、国宝太刀の写真をご提供いただきました。早いもので三十年が経ちました。

今回、国宝の太刀や御物太刀について概要を紹介させていただきます。

太刀の概要と銘文の説明

国宝 太刀（埼玉県立博物館蔵）

国宝 太刀 長さ八十二・四センチ 反り二・四センチ

表 廣峯山御鋸願主武蔵國秩父郡住大河原

左衛門尉丹治時基於播磨國完栗郡三方西造之

裏 備前國長船住左衛門尉景光作者進士三郎景政

嘉曆二年（四年（一三三九）己巳七月日（写真1）

国宝 短刀

国宝 短刀 長さ二十八・三センチ

銘 表 備州長船住景光

裏 元亨三年（一三三三）三月日

御物 太刀

御物 太刀 長さ六十八・六センチ 反り二・二センチ

表 願主武蔵國秩父郡大河原入道紗弥藏蓮

同左衛門尉丹治朝臣時基於播磨國完栗

郡三方西造之

裏 作者備前國長船住左衛門尉景光進士三郎景政

正中二年（一三三五）七月日

国宝太刀の願主は、武蔵國秩父郡住の大河原左衛門尉丹治時基であります。大河原氏は、武蔵武士の七党の一つで、丹党の秩父郡の大河原（東秩父村）を本貫としています。国宝の太刀は、姫路市の広峰神社に奉納しています。備前國長船住の景光と景政が播磨國完栗郡三方西で刀を造っています。現在の宍粟市波賀町小野周辺とされ

ます。完栗郡は江戸時代の宍粟郡の古い字です。(図1)

御物太刀と短刀は、区(まち)に「秩父大菩薩」の文字と梵字を入れていいますので、秩父神社(秩父市)に奉納しています。(図2)

短刀には願主は刻まれていませんが、作者は備州長船住景光であり、元享三年(一一三三)三月日です。御物太刀の二年前で、国宝太刀の六年前です。

御物太刀の願主は武蔵国秩父郡大河原入道紗弥藏蓮と大河原左衛門尉丹治朝臣時基の二人です。正中二年(一一三五)七月日です。

武蔵国秩父郡を本貫地とする丹党の大河原時基が、御物太刀の四年後の嘉暦四年(一一三九)に播磨国完栗郡三方西で備前長船の景光と景政に作刀させ、姫路の広峰神社に奉納しています。大河原氏は、東秩父村(大河原)で、中村氏の分家とされます。武蔵武士の丹党の中心は、中村氏で、中村氏は秩父から新保地頭として、鎌倉時代中期の承久の乱(一一二二)後に播磨国完栗郡三方西の地頭職として来ています。大河原氏は東秩父村で、中村氏の分家とされることから同じように播磨の三方西に来たと思われます。なかでも中村氏と安保氏が中心で、中村氏の本貫は、三山郷で、現在の小鹿野町です。大河原氏は、大河原郷で、現在の東秩父村です。(図3)

今も中村氏は、宍粟市波賀町有賀に住んでおられます。(中村又治家文書・中村甚之助家文書)大河原氏は、波賀八幡神社に太刀を奉納している大河原備中守之清は「播備作城記」によると千草城の城主としても知られています。

宍粟市波賀町原には河原氏が住んでおられます。

波賀町には良質の鉄を産していることから、三方西は秩父と地形

的にも類似していたのであろうと推定されます。

参考文献

『埼玉県立博物館展示総合案内武蔵武士一〇七 太刀(景光・景政)』一九八七
埼玉県立博物館

『武蔵武士 国宝太刀(景光・景政作)と大河原氏』一九九一 埼玉県立博物館
展示解説NO・四〇

国宝太刀・国宝短刀・御物太刀の補足説明

『武蔵武士 国宝太刀(景光・景政作)と大河原氏』埼玉県立博物館
展示解説NO・四〇 一九九一年六月発行によると、

国宝 太刀 長さ八十二・四センチ 反り二・四センチ

(埼玉県立博物館蔵)

表 廣峯山御劔願主武蔵國秩父郡住大河原

左衛門尉丹治時基於播磨國完栗郡三方西造之

裏 備前國長船住左衛門尉景光作者進士三郎景政

嘉暦二年(四年(一一三九))己巳七月日

国宝太刀は、羽柴(豊臣)秀吉の中国地方を攻める時期に広峰神社をはなれたといわれます。寛文三年(一六六三)四代將軍徳川家綱の日光参拝の際に、奥平忠昌が拝領したもので、その後、埼玉県立博物館の所蔵となったものです。

この太刀の銘は、「武蔵国秩父郡住」と刻まれています。

武蔵武士の歴史を伝える貴重な資料とされるもので、宍粟鉄の備

前国長船で備前刀です。

国宝 短刀 長さ二十八・三センチ

銘 表 備州長船住景光

裏 元享三年（一三三三）三月日

国宝短刀は、戦国時代には、すでに神社を離れていたとされ、その後、上杉謙信の愛刀とされ、「謙信景光」ともいわれています。短刀には願主は刻まれていません。備州長船住景光作であり、御物太刀とほぼ同時期であることから願主は武蔵国秩父郡大河原入道紗弥蔵蓮と大河原左衛門尉丹治朝臣時基ではないかと考えられます。

御物太刀 長さ六十八・六センチ 反り二・二センチ

表 願主武蔵國秩父郡大河原入道紗弥蔵蓮同左衛門尉

丹治朝臣時基於播磨國完栗郡三方西造之

裏 作者備前国長船住左衛門尉景光進士三郎景政

正中二年（一三三五）七月日

この太刀が御物になったのは、明治二十四年（一八九一）四月十日に明治天皇が当時枢密顧問官だった川村純義邸に行幸された際、同人から献上されたことによります。

参考文献

① 小笠原信夫監修『御剣』（毎日新聞社一九九八年）に写真と解説が掲載されています。

② 東京国立博物館・宮内庁・NHK編集『御即位十年記念特別展

皇室の名宝 美と伝統の精華』（NHK一九九九年）に写真と簡便な解説が掲載されています。

③ 宮内庁編『明治天皇紀』第七（吉川弘文館一九七二年）の明治二十四年四月十日条に明治天皇の川村邸に行幸のこと、その際に太刀の献上があったことが確認できます。

* 今回御物太刀について令和三年六月十四日付で宮内庁書陵部陵墓課より詳しくご教示いただきました。厚く御礼申し上げます。

写真1 国宝太刀（銘景光・景政）（埼玉県立博物館蔵）

埼玉県立博物館長岩田明様より平成三年九月十三日付教博第289号で資料特別利用許可をいただきました。厚く御礼申し上げます。

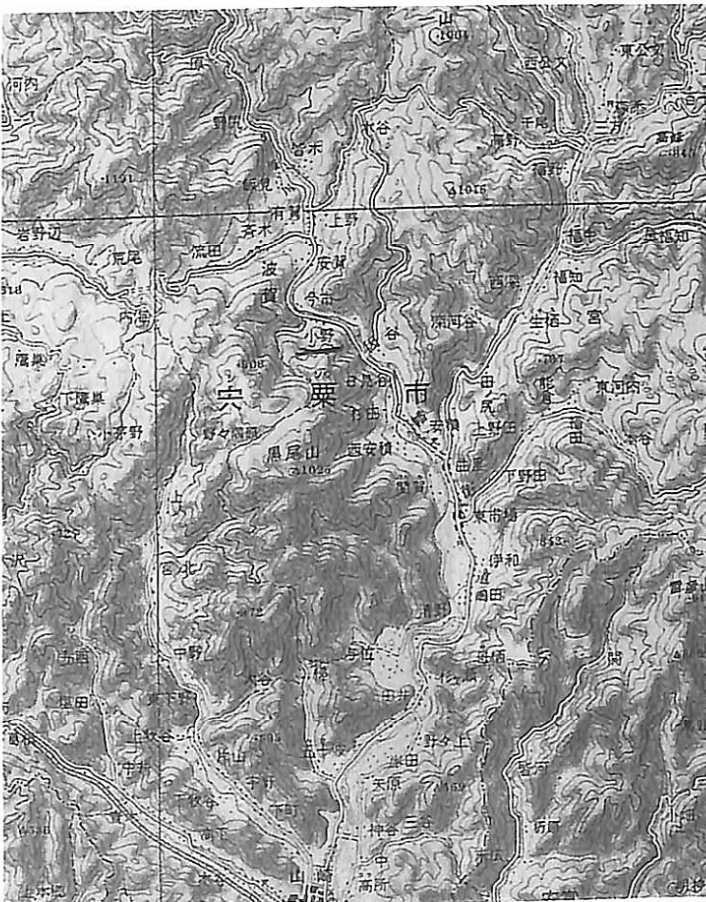


図1 兵庫県宍粟市波賀町小野 位置図



图2 秩父神社

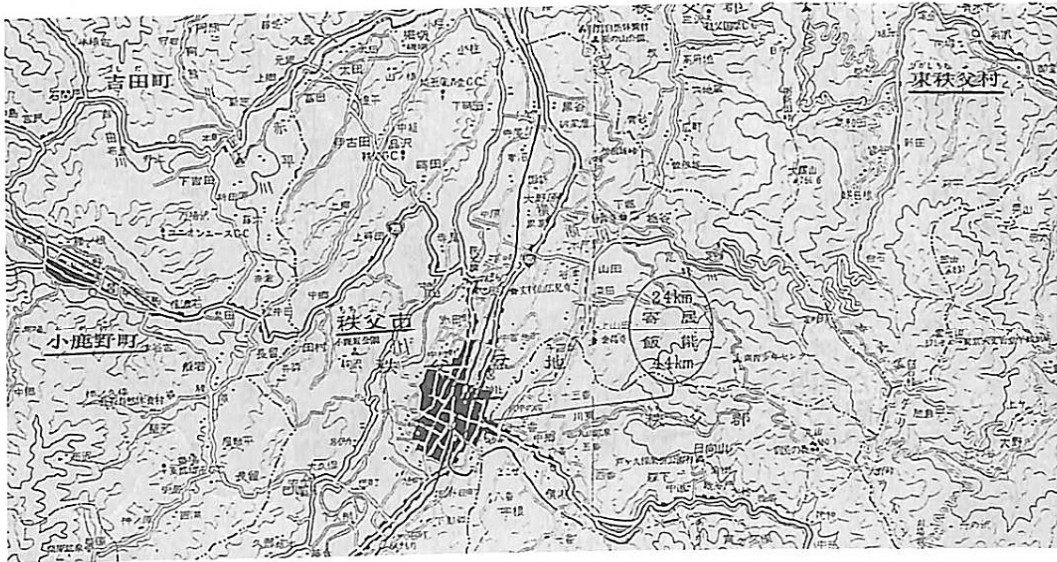


图3 秩父地方位置图

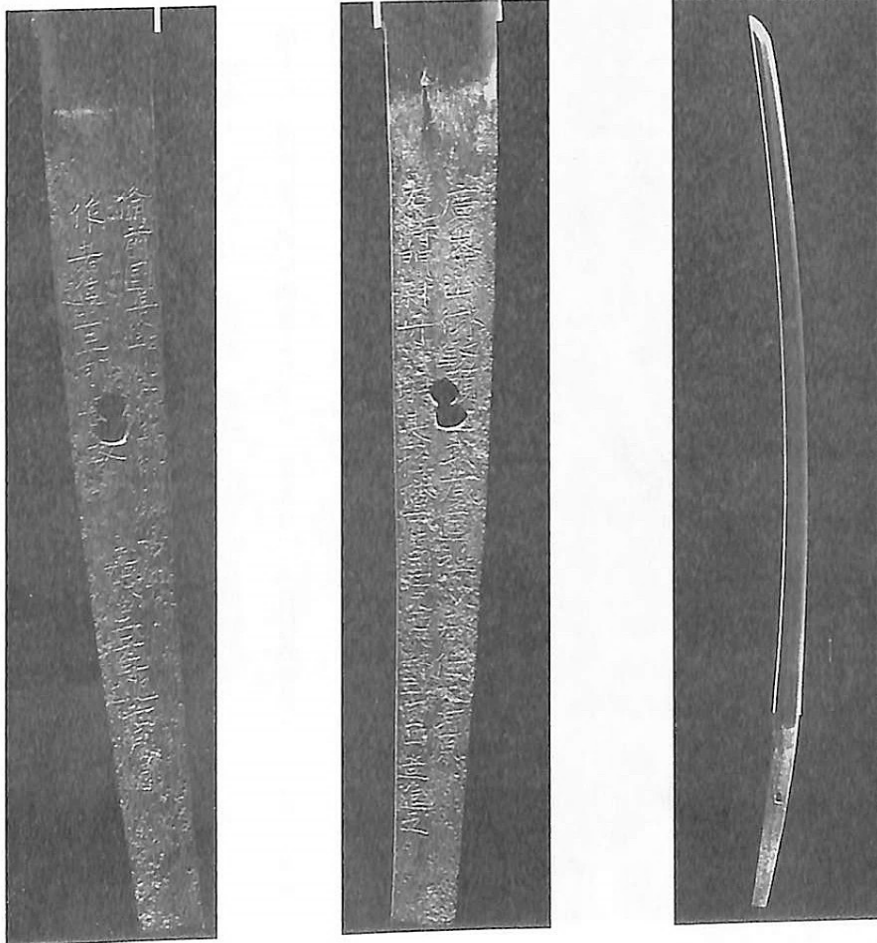


写真1 国宝太刀 (埼玉県立博物館蔵)

会員・家族の文芸

◎冠 句 (つた・いさわ・加生・山崎冠句会)

寝る前に	悲鳴を上げる体ケア	宇田 幸夫
使い捨て	限りの資源見直そう	宇田 幸夫
寝る前に	無事を感じ日記付け	坂本 忠彦
使い捨て	環境破壊温暖化	坂本 忠彦
寝る前に	ゆつたり長湯で温たまる	実友 勉
使い捨て	循環社会考えて	実友 勉
寝る前に	明日の準備を抜かりなく	嶋津 千里
使い捨て	便利なプラが海汚す	嶋津 千里
寝る前に	今日一日を仏前に	為国真佐行
使い捨て	便利な時代簡素化に	為国真佐行
寝る前に	何にも無しに息を吐く	谷笹 まや
使い捨て	畦に伏せた苗二枚	谷笹 まや
寝る前に	明日あることを念じつつ	高井 玲依
使い捨て	もったいないを口癖に	高井 玲依
寝る前に	今日の諸々振り返る	西家 侑希
使い捨て	便利な社会いつかツケ	西家 侑希
寝る前に	夜空見上げて晴れるかな	三木ひづる
使い捨て	もったいないと工夫して	三木ひづる
寝る前に	明日の予定を再確認	飯塚 正浩
使い捨て	しないつもりがゴミが増え	飯塚 正浩
寝る前に	明日のリユックを再度見る	大谷 志路
使い捨て	もったいないを取り戻せ	大谷 志路
寝る前に	漢方一包のみ込んで	中瀬 公三
使い捨て	昔思えば勿体ない	中瀬 公三

◎俳 句

天空に白兔の翔ぶや朴の花	京屋 伊助
図書館へ子規に出会ひの薄暑かな	京屋 伊助
沈丁に尖る心がまるくなる	杉山美保子
沙羅咲きて今日の命を顧みる	杉山美保子
想像の翼広げて夏來たる	高井 麗子
短冊や小筆をとりて天の川	高井 麗子
接種終え安堵の径を梅雨晴れ間	田中 良子
石路咲きてやさしき陽ざし恙がなく	田中 良子
軽やかにサンダル鳴らし素足の娘	鳥羽チエノ
梅雨籠り余技の現のおもしろき	鳥羽チエノ
友許す心となりて竹の秋	三浦 ゆき
焼き芋やコロコロ笑う児等のいて	三浦 ゆき
田の水を見回る親爺夏燕	里見 和樽
志士たちの泊りし宿屋梅雨湿り	里見 和樽
母狩にはしゃぐ子供のミニバケツ	高井 智代
廃校の記憶の隅にさるすべり	高井 智代
歳時記のリリアン赤し虫の声	速水美知代
根の国をくぐりて來たる岩清水	速水美知代
声透る新任教師梅雨の明	宗平 圭司
断層の上に社と大紅葉	宗平 圭司

*次号に掲載する文芸作品の投稿をお待ちしています
併せて新会員を募集しています

事務局だより

令和三年度の通常総会について

記

日時 令和三年四月十日(土) 午後二時より

場所 宍粟防災センター四階研修室

議事 一、令和二年度事業報告について

二、令和二年度会計報告について

令和二年度監査報告

三、役員改選について

四、令和三年度事業計画について

五、令和三年度会計予算について

総会終了後、記念講座として、一宮文化協会の記録映画「遺跡は語る Part 2 『伊和中山古墳』」を鑑賞しました。

令和三年度の研修旅行中止のお知らせ

毎年実施していましたが研修旅行は、新型コロナウイルスまん延防止等重点措置のため、令和二年度に続いて、やむをえず中止にしました。

編集後記

『山崎郷土会報 第一三七号』をお届けします。

新型コロナウイルスが感染拡大し、兵庫県においても「まん延防止等重点措置」、また、三度目の緊急事態宣言が発出され、まだまだ予断を許さない状況が続いております。

このような状況で第一三七号が無事発行できるかどうか危惧していましたが、原稿をお願いしたところ会員の皆さまのご協力により、いずれも力作が集まりました。

七月には一年延期されていた東京オリンピックの開会式も行われ、選手の方々の連日の活躍に多くの感動をいただきました。

これからも山崎郷土会報を更に充実した内容にするために、地域で取り組んでおられることや地域に伝わる伝承などについても原稿を募集します。

なお、本文中の原稿については、原文を尊重して編集しています。

(片山昭悟)

追記

NHK大河ドラマ「青天を衝(つ)く」二十二話で「篤太夫パリ」の七月十一日(日)の夜八時からみなさまも見られた方もあったと思います。今から一五四年前の江戸時代の幕末の慶応三年(一八六七)にパリの万国博覧会に渋沢栄一とともに山崎藩出身の木村宗三も同行していたことが、山崎郷土研究会の会員さんにより確認されました。詳しくは次号に紹介していただくのでお楽しみにしてください。

令和三年度・令和四年度役員名簿

役職名	氏名	住所	電話
会長	大谷 司郎		
副会長	伊藤 一郎		
事務局長	田中 健三		
会報部長	片山 昭悟		
研修部長	坂本 忠彦		
史跡部長	伊藤 一郎		
山崎地区西1支部長	竹内 克司		
山崎地区西2支部長	高井 淳		
山崎地区東支部長	伊藤 一郎		
山崎地区北支部長	伊野 操治		
城下地区支部長	片山 昭悟		
戸原地区支部長	田中 健三		
河東地区支部長	宇野 正憲		
神野地区支部長	上田 泰三		
葛沢地区支部長	矢野 賢一		
菅野地区支部長	浅田 茂樹		
土万地区支部長	森田 且元		
監事	浅田 茂樹		
監事	里見 亘		

令和三年・令和四年度										各部構成
史跡部員	史跡部長	研修部員	研修部長	研修部員	研修部長	会報部員	会報部長	会報部員	会報部長	
伊野 操治	伊藤 一郎	玉野 廣實	原 忠雄	三木 一男	坂本 忠彦	高井 淳	竹内 克司	河本 雅視	片山 昭悟	

PHOTO-STUDIO
Meyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90 〒671-2577
TEL (0790) 62-0700(代) FAX (0790) 62-0700

E-mail: gaisyo@yasuisyoten.co.jp
URL: http://www.yasuisyoten.co.jp/

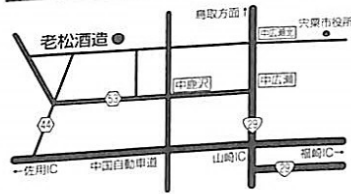
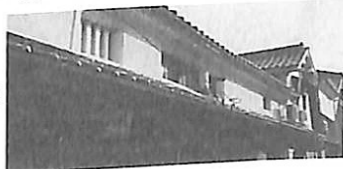
老松酒造有限公司

■老松ダイニング
発酵と麹の健康ランチ
定休日: 木曜日(予約優先)

■老松販売所
日本酒・リキュール・麹商品

老松酒蔵見学出来ます

〒671-2577
宍粟市山崎町山崎12
電話0790-62-2345



まごころを伝えます。

一献献上 品質本位 地酒

山陽 盃

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

- 相続手続時、名義変更に関するアドバイス
- 各種税務手続
相続税・贈与税確定申告手続 電子申告環境サポート
所得税確定申告
- 経理自計化のお手伝い
- 法人税・地方税・申告書作成代行
- 経営助言

〒671-2533 兵庫県宍粟市山崎町須賀澤1329-7
高橋利典税理士事務所
税理士・行政書士 高橋利典
TEL (0790) 63-2150 / FAX (0790) 63-0445



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 0790-62-0036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 靴風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL: www.isawanosato.com E-mail: info@isawanosato.com